



Data

監督：アンジェイ・ワイダ
 原作：イェジー・アンジェウスキー
 出演：ズビグニェフ・チブルスキー
 /エヴァ・クジジェフスカ/
 ヴァーツラフ・ザストルジン
 スキ/アダム・パウリコフス
 キ/ボグミウ・コビエラ/ジ
 ヤン・チェチェルスキ/スタ
 ニスワ・ミルスキ

👁️👁️ みどころ

ポーランドの巨匠・アンジェイ・ワイダ監督の代表作を「午前十時の映画祭9」で鑑賞。

ナチスドイツに占領、支配されていたポーランドは、ナチス敗北後はソ連の支配下に。そんな状況を許せない“ポーランドのジェームズ・ディーン”と称された端整な若者演じる主人公は、ソ連共産党の要人の暗殺に従事するが…。

韓国映画『暗殺』（15年）とは全く異質の、ある意味で“青春映画”のような本作が当時上映できたのは、ある種の曖昧さ、誤解のおかげ。『笑いの大学』（04年）では検閲官と劇作家との微妙な“腹の探り合い”が笑いと涙を誘ったが、本作の結末をあなたはどう理解？

日本人には極めて難しいテーマだが、たまにはこんな名作をじっくりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■「午前十時の映画祭9」でワイダ監督の代表作を鑑賞！■□■

1926年生れのアンジェイ・ワイダ監督はポーランドを代表する巨匠だが、近時『カティンの森』（07年）（『シネマ24』44頁）や『ワレサ 連帯の男』（13年）（『シネマ33』未掲載）を監督し、公開しているからすごい。そんなワイダ監督の代表作が『世代』（54年）、『地下水道』（56年）に続く“抵抗3部作”と呼ばれている本作だ。本作は1959年の第20回ベネチア映画祭で上映され、国際映画批評家連盟賞を受賞している。そしてまた、私が2007年に合格した株式会社キネマ旬報社、キネマ旬報映画総合研究所主催の映画検定3級の『公式テキストブック』（キネマ旬報映画総合研究所 著）の中で、「見るべき映画100本、外国映画編」の1本に選ばれている名作だ。

2010年2月から始まった「午前十時の映画祭」は好評の中で続いてきたが、2019年4

月に開幕する記念すべき第10回目をもって一区切りとし、いったん終了するらしい。そんな時期に「午前十時の映画祭9」でワイダ監督の代表作たる本作を鑑賞することに。

『灰とダイヤモンド』という題名は、19世紀のポーランドの詩人ツィプリアン・ノルヴィットの詩の一節「すべてのものは、みな燃え尽きて灰となるが、それでも、その灰の中に燦然と輝くダイヤモンドが残ることを祈る」から来ているそうだ。そんなクソ難しそうなタイトルからは、いかにも難解なストーリーを予想したが・・・。

■□■主人公はポーランドのジェームズ・ディーン！冒頭は？■□■

本作は1959年の映画を2018年にデジタルリマスターしたものだが、映像は美しく、違和感は全くない。『誰が為に鐘は鳴る』(43年)では、そのタイトルどおり、教会の鐘が大きくスクリーン上に映し出されていたが、本作の冒頭には、それとよく似た(?)ポーランドにある町はずれの教会(礼拝堂?)が登場する。そして、本作の主人公で“ポーランドのジェームズ・ディーン”と呼ばれていたらしい若手俳優、ズビグニエフ・チプルスキー扮する“ロンドン亡命政府派”の青年マチェクたちが、あまり似つかわしくない“待ち伏せ暗殺”に取り組むシーケンスが登場する。ちなみに、韓国映画『暗殺』(15年)では用意周到な暗殺計画と花嫁姿によるその実行がお見事だった(『シネマ38』176頁)が、本作冒頭の“待ち伏せ暗殺”はどこか牧歌的・・・?

マチェクとその相棒アンジェイ(アダム・パヴリコフスキ)はそこにやって来た車の前に飛び出してそれを銃撃し、ドライバーをたちまち射殺。逃げた同乗の男も礼拝堂の前まで追いつめて射殺したから、これにて2人は無事任務を達成したようだ。もともと、近時の邦画のようなクソ丁寧な説明は全くないから、そんな状況の理解は1人1人の観客の感性次第だが、任務終了後ホテルに入った2人は殺したはずの男・シュチュエカ(ヴァーツラフ・ザストルジンスキ)がホテルに入ってくるのを目撃したから、アレレ。マチェクとアンジェイが暗殺のターゲットとして狙ったのは、ソ連からポーランドのこの町にやって来たソ連共産党県委員会書記のシュチュエカだったが、どうも2人が間違って殺したのは普通の労働者だったらしい。そんな大チョンボをどう考えればいいのか?

■□■共産党幹部の暗殺映画(?)がなぜ検閲を通ったの?■□■

本作は「抵抗三部作」の最終作とされている。その「抵抗」とは、第1に1939年9月1日にポーランドに侵攻し、ポーランドを占領支配したナチスドイツに対するもの。第2にナチスドイツの敗退後、それに代わってポーランドを支配したソ連に対するものだ。しかし、本作でマチェクと相棒のアンジェイが“待ち伏せ暗殺”のターゲットにしたのは、新しく町に赴任してくるソ連共産党県委員会の書記だったから、本作はかなり物騒な映画だ。前述したように、『暗殺』はプロ集団による用意周到な暗殺計画だったのに対して、本作冒頭の“待ち伏せ暗殺”のシーケンスはどこか牧歌的(?)。それでも当時、新支配者たるソ連(共産党)の支配下にあり、厳格な報道管制、思想統制がはかられていたはずのポーランドで、なぜワイダ監督のそんな“暗殺映画”が制作公開できたの?ちなみに、三谷幸喜の原作を映画化した『笑いの大学』(04年)は役所広司扮する“笑いを憎む検閲官”向坂と稲垣吾郎扮する“笑いを愛する劇作家”椿の取り調

べ室における“二人芝居”がテーマでその起承転結は笑いと涙がいっぱいだった。ついに椿は向坂の検閲をパスする「笑いのない喜劇」を書き上げ、向坂をして「面白すぎる！これは一体何だ！」と言わしめる傑作を完成させたが・・・『シネマ 6』 249頁）。

本作がソ連共産党の厳格な検閲をパスしたのは多分それと同じで、ソ連共産党の検閲官は、本作は殺されるソ連共産党県委員会書記のシュチュエカを“英雄”として描いていると判断し、逆に暗殺者の若者マチェックを軽薄者と判断したためだ。たしかに本作を観ていると、ロンドン亡命政府派の同志として暗殺の指令を受けたはずのマチェックはいかにも“遊び人風”だし、後半からは任務の合間にホテルのバーにいた美人バーテンダーのクリスティーナ（エヴァ・クジジェフスカ）との恋模様まで進展していくから、この若者はかなりいい加減。しかも、最後に彼はみじめな姿で死んでしまうから、本作を観た観客は誰もこんな若者を英雄視などしないはず。そしてまた、反ソ連の意欲が湧くこともないはず。そう考えたわけだ。しかしひょっとして、ワイダ監督の真の狙いが『笑いの大学』の劇作家と同じところにあったとすれば・・・？

戦前の日本の言論封圧の時代はもちろん、第2次世界大戦終了直後のソ連によるポーランドの占領状態など何も知らない今の平和な国ニッポンの若者がそこまで理解できるかどうかはわからないが、本作を鑑賞するについては、暗殺映画(?)の本作がなぜソ連共産党の検閲を通ったの?ということをしっかり考えたい。

■□■ほんの“火遊び”から次第に本気に・・・■□■

『007シリーズ』では、“殺しのライセンス”を持ったスパイ、ジェームス・ボンドが上部から受ける命令の内容が作品ごとに冒頭で明示されるから、物語の進行は読みやすい。また、そこでは絶世の美女が“ボンドガール”として登場することが毎回予定されているから、彼女らとジェームスとの絡みを見るのも楽しみになる。但し、それはあくまで“火遊び”であり、ジェームスが本気で恋に落ちることがないのがお約束だ。

しかし、本作冒頭の“待ち伏せ暗殺”で相手を間違うというとんでもない失敗をやらかしてしまった青年マチェックはジェームスほどの殺し屋としての能力はないくせに、女にかけてはジェームスに負けないほど手が早いらしい。もっとも、ホテルのバーでバーテンダーとして働いているクリスティーナはめっちゃ美人だから、ベテランのアンジェイの方は任務の遂行に集中できている、マチェックが彼女にちょっかいを出したのは仕方ない、もちろん、カウンター越しとはいえクリスティーナほどの美女がバーテンダーの仕事をしていれば、いくら戦後すぐとはいえ、男の客からいろいろお誘いがかかるのは当然。彼女はそれに慣れていて、クリスティーナがマチェックの齒の浮いたような誘いを断ったのは当然だ。

ところが、本作でのマチェックの口説き方は独特で、あるときは意外性があったり、ある時はストーリー性があったり、そしてある時は母性本能をくすぐったりと、それなりに魅力的。しかも、顔を隠すためにいつもかけているサングラスを外してみると、その素顔は意外に端正で純情そう。そんなマチェックがなぜ要人暗殺の任務を請け負っているのかはわからないが、彼の正体は学生で、その夢は平和な状況下で勉強をしたいだけというから、真面目そのものだ。そんなマチェ

クから、「今夜仕事が終われば俺の部屋に来ないか？」と誘われたクリスティーナは当初は拒否していたが、次第にマチェックの口説きが熱を帯びてくると……？

■□■本物の恋、真剣な懺悔、そして任務遂行へ！■□■

ジェームスボンとボンダールとの絡みはあくまで遊びで本物の恋に至ることはないが、本作中盤で見るマチェックのクリスティーナに対する思いは、“遊び”から“本物の恋”に移っていくので、若い二人のそんな恋物語の進展に注目。なるほど、これなら本作は共産党幹部の暗殺映画ではなく、本物の恋愛映画といえないこともないはずだ。

本作冒頭の暗殺現場が礼拝堂というのも日本ではありえない設定だが、本作中盤でマチェックが本気で恋心を打ち明け、「本当は生き方を変えたい。勉強して働いて、普通の生活がしたいだけなんだ。」と最後の懺悔をする場所が逆さぶりのキリスト像の前というのも日本ではありえない設定。日本では特攻隊員として死んでいく若者が最後の夜、恋人に別れを告げるシーンがいろいろな映画で登場するが、本作のこの懺悔のシーンは邦画でのそんなシーンに相当するものだろう。すると、あら不思議、冒頭での大失敗を含めてそれまでは中途半端な軽薄者だと見られていた若者マチェックが、任務遂行に向けて腹を決めたこの段階に至ると急に一人前の腹の座った男に見える。シュチュエカの暗殺に向けて拳銃に弾を入れ、それを懐に入れたマチェックは、これからどのような形で任務の遂行を……？

■□■この死にザマは？これでは、英雄視はととてもとても！■□■

“暗殺”は本来陰気なうえ、密室性秘密性に富んだもの。また、人を殺すのが好きな人はいないから、“人斬り以蔵”と呼ばれ、土佐勤王党の武市半平太の命令に盲目的に従って要人の暗殺計画を実行した岡田以蔵だって、日夜自分の仕事のつらさに苦しんだはずだ。しかし、韓国映画『暗殺』で観た、プロの暗殺集団による暗殺の実行は意外にカッコ良かったうえ、あつと驚く結末もよくできていた。他方、現実にも坂本竜馬と中岡慎太郎を暗殺した男が誰かについては今なお謎めいた部分が多いが、伊藤博文をハルビン駅で暗殺した韓国の安重根は今でも韓国では英雄視されている。従って、暗殺をどう評価するか？その光と影の判断は難しい。

しかして、本作ラスト見る、マチェックによるシュチュエカの暗殺は意外に簡単であつという間だから、そのシーケンスに注目！しかし、なぜ前から銃で胸を打たれたシュチュエカはそのま前に歩いてマチェックに抱き付いていったの？そこらあたりをどう解釈するか？難しいところだが、さてあなたの解釈は？それはともかく、このように意外に簡単に任務を達成したマチェックは、その後は逃走するだけ。その手筈はアンジェイとの間でバッチリ整えてあつたから、その打ち合わせ通りに……。そう思っていると、ほんのちょっとした手違いのためマチェックは警察官と遭遇し、銃を隠し持っていることが見とがめられたからマズい。こりゃ、とにかく逃げるしかない。そう考えたマチェックだったが、本作ラストに見るマチェックのみじめな死にザマに注目！ゴミ置き場で一人倒れて死んでいくマチェックの姿を見ていると、こりゃ英雄視はととてもとても！なるほど、暗殺犯がこんなみじめな形で死んでいく本作なら、ソ連共産党の厳しい検閲をパスしたのも当然……。？

2018（平成30）年10月25日記